

「オネエ所長の調査ファイル #7」

山崎浩治

1

「車内で張り込むんだから、女装の必要なんてないでしょう？」

「あたしはいつでもキレイでいたいよ。いつどこに出会いが待ってるか分からないんだもの。でもね、おめかしする時、念入りにやり過ぎると厚化粧な印象になっちゃう。だから、あたしは自然なメイクを心がけているんだ」

「何が自然ですか。所長は存在自体が不自然なんですよ！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長・市山とイケメン調査員の透が週末の夜、金沢市内のラブホテルの前で張り込みをしている。助手席の市山は自らの「男」と「加齢」を隠蔽すべく、コンシーラーを使って化粧直しに余念がない。

午後9時過ぎ、茶髪につけまつげ、ミニスカートの若い女が足早にラブホテルの中から出てきた。玄関脇に待機していた派手なスポーツカーに乗り込むとすぐ、車が発進する。それが「DV夫から逃げている。離婚するにはどうしたらいいか」と相談してきた今回の依頼人、金沢市に住む舞(21歳)だった。

スポーツカーが向かったのは郊外のワンルームマンションである。「お疲れ様」と声をかけ、車を帰した舞が一室のドアを開けると、娘の美羽(3歳)がうれしそうに舞に抱きつくのが見える。その後、母娘が向かったのは近所のファミレスだった。店内のボックス席に座った美羽が足をぶらぶらさせながら、真剣なまなざしで何ページもあるメニューを最初から最後までじっくり眺めて注文を考えている。

「留守番ありがと、美羽。今日は何でも好きなもの注文していいよ」

美羽に語りかける舞の言葉が聞こえた。そっけないが、温かさを感じる声だった。近くの席に座った透が声をひそめて市山にささやく。

「依頼人はキャバクラ嬢をしてるって言ってましたけど、どう見たってデリヘル嬢じゃないですか。念のため周辺調査した価値はありましたね。所長は彼女がデリヘル嬢でも、依頼を受けるつもりなんですか」

小指を立ててドリンクバーの紅茶を飲みながら、市山が言った。

「デリヘル嬢だからなんだというの？ チャラチャラした格好をしてても、彼女はちゃんと母親の顔をしてる。あたしが助けるのは一人の母親。それでいいじゃない」

2

「あなた、デリヘル嬢をしてるのね」

翌日、「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスに舞を呼んだ市山が開口一番、言った。オフィスにいる時の市山はスーツ姿のダンディな中年男。やってきた舞の耳にピアス、素足のつま先にはピンクのマニキュアが塗られていた。

「デリヘルの仕事をしてるのは源氏名のハルカ。あたしじゃないわ。そう割り切ってる。デリヘ

ルの仕事がいけないの？ でも、この仕事をしてなかったら、あたしと美羽は生きていけなかったのよ！」

ムキになって口をとがらす舞を市山がなだめた。

「別にデリヘル嬢の仕事を非難してるわけじゃない。あなたはいま、若さを売って生活している。売れる若さがあるうちはいいわ。だけど若さは瞬きしているうちに消えていく。あなたの若さはいつまで売り物になるの？」

舞が不服そうに黙り込んだ。

「お説教はこれくらいにして、本題に入るわよ。DV夫との離婚準備を進める前にあなたたち母娘の安全を確保することが先決。いまのワンルームマンションは安全？」

「住民票を動かしてないから、夫には知られていないと思うけど……」

「いざとなったら行政に相談して、シェルターと呼ばれる一時避難所を紹介してもらおう手もあるわ」

「そのシェルターには美羽も入れるの？」

「もちろんよ」

「美羽が……その……」

舞が口ごもる。

「隠し事をしないで、何でも話して」

「美羽には……戸籍がないの。それでもシェルターに入れる？」

市山が思わず席を立て、気色ばんだ。

「ちょ、ちょっと待ってよ。それ、どういうこと！」

「美羽の出生届、出してないんだ」

3

高校中退後、親とけんかして能登の実家を飛び出した。大阪で年齢を隠してキャバ嬢になり、出会ったのが夫の翔(25歳)だった。最初は紳士的な客で、プライベートでも会うようになって、やがて結婚した。しかし入籍後、翔の正体が明らかになる。職業はサラリーマンと言っていたが、定職はなく、ふらりと出かけては何日も帰ってこないヤクザ者で、生活費は結婚後も続けたキャバ嬢の給料だけが頼りだった。

たまに帰ってきた翔は些細なことで腹を立て、手近な物にあたる。初めはひたすら謝ってことを済ませようとしたものの、そのうち舞にも手を上げるようになった。平手がグーになるまで時間はかからず、全身に青あざが絶えなくなっていく。

美羽が生まれたのは1年後だ。出産したクリニックで出生証明書もらったものの、役所に行って出生届を出さなかったのは翔の暴力が日ごとに激しくなり、とてもそんな余裕がなかったからだ。そして出世届の提出期間が過ぎて時間が経ってしまうと、いまさら手続きを行えばネグレクトとして罰を受けるのではないかと恐れたのだった。

美羽が成長しても翔の暴力は収まらず、命の危険を感じたことは一度や二度ではない。よちよ

ち歩きの美羽では逃げることもできない。このままでは美羽とともに殺されると思い、逃げ出した。帰るところは故郷の石川県しかなかった。

金沢にきてすぐ、デリヘルの仕事 시작했다。キャバ嬢と違って拘束時間が短いので、美羽と過ごす時間を少しでも長く確保するには好都合だったのだ。しかしデリヘル嬢といってもそれほど稼げるわけではなく、美羽と2人で風邪をこじらせ何日も寝込んだ時、手持ちの金が尽きかけたことがある。

戸籍も保険証もない美羽では病院にも連れていけない。このままでは小学校にも行けないだろう。生きていても仕方がない——そう悲観して、眠っている美羽の首に両手を回す。頼りないほど、か細い首だった。少し力を込めたら折れそうだった。指に力を込めることなんて、とてもできなかった。小さな体を抱きしめて、ほおずりする。

「ごめん、美羽」

この子のために人生をやり直そう、と思った。

4

市山が能登にある舞の実家を訪ねると、作業服の豊(51歳)と明美(49歳)が慥然とした表情で出迎えた。豊は建設現場で働いている。父は一度言い出したら聞かない頑固な性格で、いつも母が苦勞している、と舞は語っていた。家出の原因もそのあたりにあったのかもしれない、と市山は思う。

「あなたたちの一人娘、舞さんのことで伺ったわ」

市山があいさつすると、豊がつっけんどんな口調で言った。

「娘はとっくの昔に勘当しとる。わしらには関係ない」

「それって一体いつの時代の話？ 戦前ならともかく、現代の法律に勘当なんて制度はない。親子は永遠に他人になれないのよ」

市山が夫婦の眼前に、舞と美羽が写ったスナップ写真をかざす。前夜、ワンルームマンションに赴き、撮ってきた写真だ。市山からぬいぐるみをもらった美羽が舞とともに弾けるような笑顔を浮かべている。夫婦の表情が変わった。

「美羽ちゃんは生まれてから3年間、戸籍のない状態で過ごしてきた。お母さんが仕事をしている間はアパートの部屋でお留守番。いままでお友達は一人もいなかったそうよ」

夫婦の視線が美羽に釘付けになっている。

「舞さんは戸籍がなければ、学校にも病院にも行けないと思い込んでいたの。だから、美羽ちゃん存在を世間の目から隠そうとした。たとえ戸籍がなくなっても、行政サービスを受けることはできたんだけどね」

「……」

「いまの美羽ちゃんは社会的に幽霊と同じよ。可愛い孫娘を幽霊のままにしておいてもいいの？

あなたたちがいま、やるべきことは幽霊として生きてきた美羽ちゃんにたっぷり愛情を注いであげることなんじゃないかしら」

その時、写真を凝視していた明美が不意にクスリと笑った。

「やっぱり親子やねえ……笑った顔が舞の子どものころとそっくり」

その言葉で、強ばっていたその場の空気が一気にほぐれた。腕組みした豊がそっぽを向いて、ぼそりつつぶやく。

「舞は昔、トランプが好きやったな。久しぶりにやるか、今度は家族4人で」

無然とした表情に変化はなかったが、語尾が震えていた。明美が感極まった表情でハンカチを目に当てた。

5

それからほどなく、舞は市山のアドバイスに従って本籍のある役所に赴き、事情説明して出生届を提出、美羽の無戸籍の状態は解消された。同時にデリヘル嬢の仕事も辞めた。能登の実家から通勤圏内に適当な仕事がなかったため、金沢市内で宅配便の仕分けのアルバイトをしながら自動車学校に通い出す。美羽は祖父母とともに暮らし、週末、母親が帰ってくるのを首を長くして待っている。いずれ舞が運転免許を取得して宅配便ドライバーとなり、生活が安定してきたら美羽を引き取って暮らすつもりだという。

一方、離婚手続きに関してはDV夫が住所不定であるため調停を行えないので、弁護士に相談して近々、離婚裁判を起こすことになっている。「金沢プライベート・リサーチ」のオフィスで透が「依頼人は離婚できますか」と市山に尋ねた。

「相手は住所不定のヤクザ者よ。裁判所内の掲示板などに書類を掲示する公示送達をして離婚を求める裁判を開けば、どのみち出頭しないでしょう。民事の欠席裁判は原告、つまり依頼人の全面勝利になる。それで依頼人は晴れてDV夫からの呪縛から解放されるってわけ」

半年後、市山と透が依頼人の様子を見に行くと、美羽が通う保育園では保護者を招いて七夕祭りが行われていた。相変わらずチャラチャラした格好の舞と祖父母に囲まれた美羽は、はにかみながらも、どこか誇らしげだった。見学する保護者にまじった市山は金髪、へそ出し、ホットパンツ姿で女に変装している。ホットパンツから半分尻を出し、周囲の視線を集める市山が依頼人家族を見つめながら言った。

「ねえトオルちゃん、女の幸せって何だと思う？ 愛する男性と平凡な家庭を築くこと。かわいい赤ちゃんを産んで、すくすく育てること。あたしにはどちらも手が届かない」

「ま、それはそうでしょう。男なんだから」

「だけど、その幸せに向かって精一杯生きていくことが `女の人生、だって思うのよ」

「所長はいっぺん `男の人生、を見つめ直した方がいいと思いますけどね！」

美羽がひたむきなまなざしで、七夕の短冊を笹に飾りつけている。透がさりげなくのぞき込むと、まだ字の書けない美羽の短冊には笑顔の人物が4人描かれていた。母と祖父母、そして美羽自身の4人で暮らしたい、と願っているのだろう。透の傍らでは園児と一緒に市山がちゃっかり自分の短冊を飾っていた。

市山の願い事は「あたしの彦星様とめぐり会えますように！」だった。